Special Interview

西名弘明新会長に聞く

何事もスピード感が大切
勇気をもって
変革すべきところは変えていきたい

関西学院同窓会 会長

西名弘明

西名弘明（にしな・ひろあき）

1968（S43）年に関西学院大学経済学部卒業後、オリエント・リース株式会社（現オリックス株式会社）入社。1998年、取締役兼執行役副社長に就任。2005年、オリックス・リアルエステート（現オリックス不動産株式会社）代表取締役会長就任。2009年にオリックス野球クラブ株式会社の代表取締役社長に就任し、現在は名誉会長。2018年４月、関西学院同窓会会長に就任。

２０１８年４月に新たに同窓会長に就任された西名弘明氏。

関学同窓会は、長期にわたる木村会長の後、森下会長、大橋会長、村上会長が新しい時代を牽引する会長のバトンをリレーしてこられました。それぞれの会長は、その人間性やポリシーを持って同窓会の運営に当たられ、同窓会も時代のニーズに合わせて様々な変革を遂げて来ました。

村上会長から、次世代へのバトンを受け取られた西名新会長。社会的には、オリックス・バファローズの社長、会長としての知名度も高い。しかし全く分野の異なる同窓会の会長を引き受けるには、様々な葛藤もおありだったと推測いたします。同窓会のリーダーとしての覚悟や思いと抱負を伺い、同窓の皆様に大きな温かい新会長の人間像を広く知っていただきたいと、塚本惠美子編集委員長が巻頭インタビューをお願いいたしました。

豪放磊落に見える外観よりは、意外に勉強にも真面目な学生でした

―ご出身はどちらですか。

西名　生まれも育ちも京都です。中学は京都学芸大学附属京都中学校（現京都教育大学附属京都小中学校）に通っていました。ここは学校の先生のご子息が多く通っていて、とても真面目な雰囲気の学校でした。クラブ活動はバスケットボール部に入っていました。でも、勉強もきちんとする、そんな中学生でしたね。

高校は京都市立伏見高等学校（現京都市立京都工学院高等学校）に進学しました。普通科でしたから、とにかく勉強勉強のカリキュラムが組まれていて、クラブ活動をしている暇がないくらい。本当に真面目に勉強していました。

―関西学院大学に進学されたのは、どのようなきっかけだったのですか。

西名　元々は国立の大学を目ざしたのですが、次に私立大学はどこを受けるか、となった時、神戸に住んでいた親戚が「関西学院大学はいい大学だ」と薦めてくれ、願書まで用意してくれたのです。それなら、受けてみようということで、受験で初めて西宮上ケ原キャンパスに行きました。

その当時、上ケ原の大学の周りはまだあまり家が建っておらず、豊かな自然が残っていました。正門から甲山を背景にした時計台と広大な芝生広場を見た時、「なんてきれいな学校なんだ」と驚いたものです。京都の同志社大学や立命館大学とは、雰囲気がまた違いますからね。ヴォーリズが手掛けたスパニッシュ・ミッション・スタイルの建物群も美しく、別世界でした。

―会長の座右の銘は「縁」だとお聞きしました。関西学院大学に合格されたのも、縁だったのかもしれないですね。

西名　本当にそうです。今の私があるのも関西学院大学のおかげですから、縁だと思います。

広告研究会とサマーストア青春そのものでした

―経済学部に入学されました。

西名　経済政策が専門の小西唯雄先生のゼミに所属していました。私は小西ゼミの第１期生で、ゼミのＯＢ会の会長も務めています。初代のＯＢ会長がずっと続けているのも珍しいと思いますよ。

―何かクラブ活動をされていたのですか。

西名　広告研究会に入っていました。私が学生のころは商学部の地階に部室がありました。歴史があるクラブで今も続いており、同窓生は全員で７００人ぐらいいるんじゃないでしょうか。入会したのは本当に偶然。新入生の勧誘の時期に、ふと広告研究会の看板に目が行って立ち止まってしまったのです。そうしたら先輩がやって来て「今度説明会があるから来てみて」とチラシを渡されて。行ってみたら、サマー

ストアという夏のイベントがとても面白そうでしたので、入会しました。

―サマーストアとはどのようなイベントなのですか。

西名　夏休みに約40日間、広告活動の実践として浜辺におしゃれな喫茶の店を出すのです。市役所との交渉、協賛会社への依頼、広告制作、店舗建設など、事前の準備から実際の営業まで、すべて学生の手でやります。サマーストア営業中は近くの寺に合宿して共同生活。広告研究会のメインイベントです。私が幹事長（研究会の代表）をしていた年は、それまで新舞子海岸で行っていたサマーストアを福井県の敦賀松原海岸に移した最初の年だったので、敦賀市や観光協会をはじめ地元の人々や企業に理解を得るのは結構大変でした。でも、みんなで頑張って成功させた思い出は忘れられません。青春そのものでしたね。

―広告研究会のお仲間とは今も交流があるのですか。

西名　同期とは「四三会」の名で毎年のように同期会を開催しています。旅行に行ったり、食事をしたり、野球観戦をしたり、この時ばかりは学生時代に戻ってしゃべりまくります。コアメンバーは男性が15人、女性が5人。個性的な人ばかりですよ。

卒業間際の広告研究会の同期たちと。
右から2人目が西名会長。

広告研究会の機関誌『ADKG』
第7号（S.42.11発行）

『ADKG』論文集（S41.6発行）

当時の広告研究会には制作に興味がある芸術家肌の人と、マーケティングに興味がある硬派な人間が入り交じっていました。多彩な人材がそろっていましたね。だから、今会っても面白いのです。18歳から付き合ってもう50年以上たちました。「孫が関西学院大学に入った」という人もいます。こんなに長く付き合える仲間ができたことは本当にありがたいと思います。これも縁ですね。

社会に出てからはオリックス一筋 オリエント・リースから球団社長まで

―広告研究会ではかなり活発な活動をされましたが、広告業界には就職されなかったのですね。

西名　入社したのは、オリエント・リース株式会社。創業してまだ4年の若い会社でした。「リース」という言葉自体が社会に浸透していなかった時代です。大学の就職指導の先生にも「なんで、そんな訳が分からない会社に行くんや」と言われました。でも、私にとっては「面白そう」「新しいことができそう」な会社でした。

当時の日本は高度経済成長期でしたので、設備投資意欲も旺盛で金融機関からの借り入れだけでは不足する時には、リースを使うことによって最新の機械や設備を調達したのです。特にコンピューターは黎明期。そろばんや計算機からコンピューターへとビジネススタイルが大きく変化する時に「いち早く導入したいけどコンピューターはたいへん高価」という企業にとって、リースはもう一つの選択肢だったのです。

入社してからずっと営業です。楽しかったですよ。いろいろな人と会って、営業に走りまわってました。夜、家で食事をすることはほとんどありませんでした。私はお酒があまり飲めないので、そこはちょっとつらかったですが。

―オリエント・リースはリース以外にもどんどん業種を広げ、球団経営もされています。

西名　社名をオリエント・リースからオリックスに変えたのは、リース事業は全体の3割ほどで、多角的な金融サービス業を展開していたので、その実態に合わせようというものでした。ちょうど同じ頃三和銀行のリゾート研究会で宮古島に行っており、夜の食事の時に雑談で「球団を持てたらオリックスという新社名の知名度も上がるな」といった話をしていました。すると、一週間ほどして、三和銀行の企画の担当から球団を持つことに関心はおありですかと話があり、色々検討した

結果阪急ブレーブス（現オリックス・バファローズ）を買収することになりました。1988年でした。会社にとってはかなりの英断だったと思います。そして翌年、社名を変更。球団を持ったことで知名度は一気に上がりました。球団を買収しなければ、「どこかの新興の企業」ぐらいの認知だったと思いますね。会社にとって大きなターニングポイントでした。

―買収後は球団運営のお仕事をされていたのですか。

西名　関わったのは買収の部分だけで、その後は球団運営から離れていました。球団の社長に就任したのは買収から20年たった2009年です。当時球団社長を務めておられた松岡良伯氏が体調を崩されたこともあって急きょ手伝ってくれないかと。青天のへきれきでした。

それまでは野球とは無縁で、むろん野球部に入ったこともなく、専門的な知識はまったくありませんでしたので、集客や広告の営業に全力を注ぎました。本拠地（京セラドーム）を活性化させ、野球以外のイベントを増やすとともに、試合のインターネット配信で収入増を図りました。プロスポーツも、野球以外にサッカーやバスケットなど選択肢が増えてきていますから、あぐらをかいていては、球団経営はうまくいきません。少しでも早く次の手を打つ。これはビジネスの基本です。

球団のみならず、オリックスという会社は新しいビジネスチャンスに出合った時にいち早く決断し、実行してきました。劇場やゴルフ場、旅館、水族館も経営しています。スピード感を持って行動することはとても大切です。

「縁」あって同窓会長に今後の抱負

―球団の社長職を退かれたとはいえ、まだ会長職を務めておられるご多忙の中、関西学院同窓会の会長職をお引き受けいただき、ありがとうございます。

西名　関西学院での学生生活は今の私に大きく影響しているのです。スクールモットー“Mastery for Service”は支えになっています。いつも心のどこかにありますね。ですから、どこまでお役に立てるかは別として、関西学院に少しでも恩返しがしたいと考えて、同窓会の会長をお引き受けしました。

―同窓会について、どういう印象をお持ちですか。

西名　会長になってから、いくつか支部を訪問させていただきました。支部長さんをはじめとする役員、スタッフの皆さんが熱心にやっておられることに驚きました。と同時に、今まであまり携わってこなかった自分を大いに反省しました。本当に申し訳なかったと思います。しかも皆さんボランティアですよ、無償の愛です。愛校心を感じましたね。同窓生の皆さんは支部の集まりで必ず校歌を歌いますし、これほど愛校心のあるOB・OGを持つ学校はほかにないんじゃないでしょうか。スクールモットーもそうです。スクールモットーや校歌がここまで浸透しているのは関西学院をおいてほかにありません。

―今後の同窓会運営に関する抱負をお聞かせください。

西名　まだ具体的なビジョンは決めて

いないのですが、まず、女性が参加しやすい同窓会を目ざしたいです。会長職を引き受けて久しぶりに母校を訪れた時、女子学生が多いことにびっくりしました。この人たちが社会に出て同窓生となった時、「同窓会は男性社会だから」と敬遠されてしまうようでは駄目です。女性はほとんどが専業主婦という時代は終わりました。今は社会においても女性の力は不可欠です。同窓会として、社会で頑張っている女性の皆さんの一助になればと思います。

―確かに卒業生数に比べて、同窓会に来られる女性は少ないです。

西名　「年に一度のホームカミングデーぐらいは、同窓生で集まりませんか」といった具合に、参加しやすい雰囲気をつくり、それを広報していけばいいのではないでしょうか。帰る際には「関学の同窓生でよかったな」と思ってもらえたらうれしいですね。あまり大層なことではなく、ちょっとした集まりのような感覚で気軽に参加できる雰囲気づくりが大切なのではと思います。あとは、もっと女性が参加したくなるような企画を考えていく必要があります。お子さんも一緒に楽しめるようなものもいいですね。

―女性が参加しやすい企画は、男性も参加しやすいでしょうね。

西名　その通りです。関西学院はさまざまなクラブが全国大会で優秀な成績を収めています。例えば、アメリカンフットボールや野球、サッカー、ラグビー、グリークラブなど。そのような競技の応援に同窓会で参加するというのもいいのではないでしょうか。

―ほかには何か考えていらっしゃいますか。

西名　東京の拠点の充実です。今は卒業生の約半数が関東、特に東京で就職します。世の中全体が東京に集中することの是非はさておき、この流れは止められません。東京や関東に住む同窓生は、これからもっと増えるでしょう。その対策を今から進めていく必要があります。

東京や関東の支部の皆さんは丸の内キャンパスを集まりの場に使われることが多いようですが、「狭い」という声をよく聞きます。丸の内キャンパスは現役学生も就職活動などで利用することが多い関西学院の東京の拠点です。大学とも協議しながら、もう少し使いやすいものにしていきたいですね。東京の拠点の充実は、東京での関西学院の知名度を上げることにもつながると思います。

いずれにしてもスピード感は大切にしたいです。私の任期は3年。長いようで短い時間ですから、できるだけ早く方向性をだしたいと思っています。

―変えていかなければいけない部分もあるということですね。

西名　支部長さんたちはボランティアでやっておられますが、これにも限界があると思いますね。どこから有償にするか、その線引きは難しいですが、検討を重ねて、やれることはすぐにやりたいと思っています。

―最後に同窓生にメッセージをお願いします。

西名　日本はもちろん、今や世界各地にいる関西学院の同窓生は約23万人。すごい数です。同窓生が集まれば大きな力になります。最近までサラリーマン生活を送ってきて実感するのは、一人では何もできないということ。人は誰も周りの人に支えられて生きています。同窓生みんなが支え合える同窓会にしたいし、また、そういう同窓会にするためにスタッフや役員の皆さんが頑張っていることも伝えていきたいと思います。皆さん、ぜひ一度、同窓会の行事に足を運んでみてください。

インタビューを終えて

続々と刊行された写真集

インタビューに当たって、少し緊張していたのですが、卒年がほぼ同じということで、「ミス・オハラがこわかった!」など、共通の思い出話でスムーズに話を進めることができました。オリックス球団の会長ということで、さぞかしスポーツ好きの方かと思っていましたが、クラブも広告研究会というのも意外でした。イチローの話なども気さくにしていただき野球門外漢の私でも、楽しくお話を聞くことができました。

インタビューが終わってから、趣味の写真のお話を伺ったので、本文に入れられずに残念なのですが、国内海外にも撮影旅行に行かれるくらいのかなりの腕とカメラと熱意を持っておられる様子。花や景色の美しい写真集も見せて頂きました。53歳で始められた写真の世界に、また違う会長の魅力を垣間見ることができました。

（編集委員長・塚本惠美子）